

# ヴァージニア・ウルフ なんて怖くない！

## 白井 雅美

(大学文学部教授)



「ヴァージニア・ウルフなんて怖くない」のヴァージニア・ウルフですか？と、よく聞かれる。それは、私が専門とする英国の女性作家の名前を、アメリカの劇作家が作品のタイトルに使っただけである。私は、直接的ではないが、間接的に関係があるというような曖昧な答えをいつもしてきた。

そして、私のウルフ研究も、神戸大学院大学時代に始まった一人の作家研究から、より包括的、学際的に広がりをもってきている。ウルフが提示したフェミニズムを出発点に、作品の中に埋め込まれた社会的、政治的、経済的、法的、そして文化的な事象を掘り起こし、周辺化されてきた弱者の声を再現させるというのが、私の一貫した研究方針である。米国の大学院でウルフに関する博士論文を書いていた時に出会ったフェミニズム理論とアジア系アメリカ文学などのマイノリティ文学が、私の研究分野を悉く広げてしまった。つまり、私も、もうヴァージニア・ウルフなんて怖くないのである。

留学から帰国してすぐに赴任した広島大学での九年間と同志社大学に移籍して

からの三年間の間に、学問をめぐる考え方も大きな変貌を遂げた。文学研究においても、既成の学問領域である分野・ジャンル・時代を超越して活発に議論される時代が到来したのである。アメリカでは、大学・大学院教育の現場において、その試みが実を結び、若く優秀な研究者が多く誕生してきた。

私が第一回大会から頻繁に参加してきている国際ヴァージニア・ウルフ学会においても、十二回を迎える今年の大会では、大きな変化が見られた。この間、未熟な論文を発表する場を与えられ、育ててもらった私が、分科会の主催や司会、さらには企画の相談役になり、いつの間にか年長の部類に入ってしまった。そして、今から三十年前に創設されたヴァージニア・ウルフ学会の創始者の一人であるJ・J・ウイルソン教授が定年退職するのを期に、今年の大会主催者となり、そこに発表論文をよせた研究者の九割が、ニュー・フェイスだといっているのである。そして、その論文のテーマも、驚くほど多様でユニークなのだ。

そして、世代交代は、さらに進む。英

米文学研究では最も権威がある国際学会MLA学会において、二年前に久しぶりに論文を発表した時のことである。私を迎え入れてくれたのは、開催地ワシントンD.C.に住む若い研究者であった。彼女の自宅で開かれたウルフ学会のパーティーには当時五歳であった私の娘を含め、七人の子供たちが集ったのである。

私が娘を同伴するというので、二人の子供の母であるパーティーの主催者だけでなく、他のウルフ研究者が子供を連れて来たのであった。カリフォルニア巻きやいなり寿司に舌つづみを打ちながら、走り回る子供たちを見ていたウイルソン教授が、つぶやいた。「新しいウルフ世代の誕生ね」と。

世代交代をしながら、目覚しく頭角をあらわしてきた文学研究の一つに、アジア系アメリカ文学がある。二十年程前から、アメリカ文学のカノンを崩すエッセック文学が文学理論の対象となってきた。その中で、地味な分野であったアジア系アメリカ文学の研究がここ十年程の間に非常に活発になってきている。研究書だけでなく、多くのアンソロジーや研

究の手引書が出版されてきている。

私自身も、日系アメリカ人作家に関して、米国西海岸を中心に収容所体験を軸にした作品から、アメラジアンによる文学、さらにハワイにおけるアジア系作家が作り出したローカル文学の研究をしている。ここ数年、エスニック研究の国際的な専門誌や出版社に依頼されて、論文や研究書の査読を行ってきた。また、今年米国で出版されるアジア系アメリカの文献研究書にも、私より若い編集者の助けを得て、ヴェリナ・ハス・ヒューストンとダレル・ラムに関する文を寄稿させてもらった。研究方法もすっかりIT時代に入り、英米の学者が協力して現在作成中であるインターネットのThe Literary Encyclopedia (www.LitEncyc.com) というプロジェクトにも、日系詩人ミツエ・ヤマダとジャニス・ミリキタ二に関する項目で、参加する機会も得た。

同志社での教育現場においても、グローバルな視野で文学を読む姿勢を学生たちに期待している。同志社に赴任した年には、アメラジアン劇作家ヒューストンを客員研究員として受け入れた。また、

ハワイの日系詩人ジュリエット・S・コノさんにゲストとして授業に来ていただいたり、AKPのアメリカ人留学生に英文学科の学生との討論に参加してもらったりもした。学生の中には、二年次に、現在活躍する米国詩人とEメールでコンタクトを取ることに成功した者もいた。そのような成果を最終的には文集という形でまとめることもしている。

今後も、若い学生たちに刺激を与えられる研究・教育に力を注ぎたいと思う。



2002年6月、3年次のゼミ生と。

# ファイナンス市場の 実証分析

新関 三希代

(大学経済学部助教授)



私の研究テーマは、日米の金融市場において債券、株式、外国為替、そしてその派生商品といった危険資産のリスクを推定し、評価するとともにマクロ経済との関係を理論的、及び実証的に分析することです。

「株安、債券安、円安」と経済不況の続く現代社会において、わが国金融市場の動向は、世界的にも非常に重要なものになってきています。そんな中、一九九八年にスタートした日本版ビッグバン、相次ぐ大手金融機関の倒産という未曾有の事態によって、投資家の資産運用方法は大きく変貌しました。投資家は、どの金融機関を選び、投資対象金融商品を何にするのか、また、それをどのように運用するのか、自らの金融知識と情報で判断しなければならなくなったのです。当然、その判断を誤ると多額の損失(リスク)を被ることになります。まさに、「国民レベルの「リスク・テイクング時代」の到来です。

元来、日本国民は「超」安全志向型、「超」危険逃避型投資家精神を有してい

ます。貯蓄に対しても欧米のそれとは異なり、郵便貯金等元本保証のある貯金のウエイトが高いのが現状です。しかし、近年のような「超」低金利時代においては、利息による収益は望めません。より高い収益を望む投資家にとって、もはやリスクのある金融商品(危険資産)への投資、ならびにそのリスク管理は不可欠なものになっていきます。ここで、金融商品のリスクとは何でしょうか。また、市場においてそのリスクをどのように測定することができるのでしょうか。私の研究目的の一つは、このような危険資産のリスクを理論モデルとの整合性の観点から推定し、検証することです。

ところで、日々変動する株式価格の動向を確実に予測することは可能でしょうか。答えは、「ノー」です。過去のデータ、及び高度なコンピュータ知識を駆使すれば、その挙動をある程度は予測することができそうですが、完全に予測することはできません。各金融市場において需要と供給によって決定される金融商品価格は、市場参加者が抱く将来の価格に対す

る予想に大きく依存します。これらの情報は、全知全能な神以外知り得ません。したがって、現実には将来の株価を予測することは不可能なのです。

このように株価といった危険資産価格が不規則に変動し、その変動を確実に予測できないということは、それらが確率的に変動していることを意味しています。また、時間の経過とともにこの確率的变化の様子も変わってくることから、これら危険資産価格の動向は、確率過程論のフレーム・ワークで捉えることができます。ある危険資産価格の変動がある確率過程にしたがっていると仮定し、その均衡価格モデルを導出することが、近年の投資理論の大きなテーマになっています。私の研究においても、価格の確率的变化をリスクと捉え、その拡散係数(ボラティリティ)を推定することでリスクを測定し、市場、ならびに価格理論モデルの評価を行っています。

近年の世界的金融市場の特徴として、ハイリターンとローリスクという相反する投資家の要求を満たすべく、先物やオ

プションといった金融派生商品を組み込んだポートフォリオによるリスク管理が挙げられます。わが国においても一九八〇年代末から株式、債券、そして外国為替の先物、オプションといった金融派生商品市場の整備が急ピッチで進められ、めざましい発展を遂げてきています。

では、先物やオプションといった金融派生商品の価格理論モデルは、どのように求められるのでしょうか。前述のように先物やオプションの原資産、現物危険資産の価格は、池に浮かぶ粒子の動きと同様、確率的に動きます。これを粒子の動きを記述する確率過程モデルと同様のモデルで記述し、それを要素とする関数型、確率微分方程式を導出します。この方程式を各金融派生商品の境界条件のもとで解くことにより、その均衡価格モデルを導出することが可能となります。

ここで問題となるのは、現物資産価格の変動を記述する確率過程モデルが正しいのかどうか、また、導出された理論モデルが市場のデータと整合的であるかどうかです。当然、現物資産価格の確率過

程モデルの仮定を変えれば、派生商品価格に対して異なる均衡価格モデルが導出されることとなります。そこで、投資家が市場で想定する確率過程モデルを現実のデータを用いて推定するとともに、それをもとに新しい均衡価格モデルを導出することが求められてきます。私の研究においても様々な危険資産の確率過程モデルを推定し、それをもとに金融派生商品価格の均衡理論モデルの導出、ならびに推定を行っております。

今後、わが国の経済状況はますます混乱状態に陥ると考えられます。国民一人ひとりが金融資産のリスクを認識し、自分の資産管理を自己責任のもとで行わなければならない時代です。これに答えるべく、さらに複雑多様な金融商品が登場するでしょう。今後よりリスクの観点から、金融市場における理論モデルと現実データとの掛け橋を行っていきたくと思っています。

## 音楽学における楽器の「実践」の意義と ショパンのワルツから 筑前琵琶研究にいたるまでの道のり

### シルヴァン・ギニヤール

(女子大学学芸学部教授)



私の専門は日本の伝統楽器である筑前琵琶の音楽構想を研究していますが、振り返ればこの研究にいたるまでに数々のことがありました。私は学生時代、常にいろいろな葛藤があり、またさまざまな壁がありました。その壁とは音楽研究の領域についてです。大半の奏者たちは自分の楽器を演奏することしか興味がなく、音楽を科学的に研究する「音楽学」には無関心でした。一流の奏者は「音楽学」を学ぶ者を軽視し、また「音楽学」といえば「西洋音楽史研究」を学ぶものとされてきました。つまり「民族音楽学」は、確立された学問であったにもかかわらず、研究対象とはみなされない分野だったのです。

話は高校の卒業時にさかのぼります。当時私は演奏すること、つまり「実践」に興味があったので、チューリッヒの音楽院 (Conservatoire) に入り、そこでピアノを専攻しました。しかし、毎日鍵盤の前に座り一時間ずつの割合で、運指練習などを学ぶことは好きになれませんでした。というのは、ピアノという一つの世界がだんだん狭く感じられてきたか

らです。やがて私はヨーロッパ以外の音楽や美術に魅了されるようになり、私の興味は少し風変わりな方向へ向いていきました。画家であった父親が日本の美術に興味があり、本棚には北斎の浮世絵など日本美術に関する本が並んでいましたので、西洋以外の音楽に関心を持ったのは父親の影響が少しあったからかもしれません。そして私はもつといろいろな多くのことを学びたかったので、ピアノを教えるライセンスを習得してからチューリッヒ大学に入学しました。この転学は、残念なことに私のピアノの先生には理解してもらえませんでした。

転学して音楽史に興味が湧いた私は、さっそくショパンのワルツを音楽学上で研究し始めました。四年で修士論文を仕上げましたが、指導教授 (Dr. E. Fischer) の勧めで、このワルツの研究を更に深めて、文献的な調査も加えました。最初にショパン以前の様々なワルツを研究し、そのためにワルシャワを訪問し、国立図書館では約二十五曲のワルツを調べ、ショパン協会 (Chopin-Institute) では約三週間自筆譜の調査を

行いました。他の研究旅行もしながら、追われるようにショパンのワルツについて論文を書きあげました。それで博士論文を作成できました。その頃すでに、次の研究は何にするかを決めていました。

それは、シューマンの研究家として名高い前田昭雄先生の邦楽の講義を聞き、日本の伝統音楽を専攻することでした。彼は、西洋音楽と東洋音楽を融合した私にとつて模範的な存在でした。私のショパン研究の指導官には変わった興味としてしか受け取ってもらえませんでした。私が、私には正しい道に思えたので、新しい研究へ進むことを決意しました。ただし日本の伝統音楽を専攻するならば、やはり一つの楽器のジャンルや時代を選択しなければ、専門家にはなれません。そこで前田先生の推薦で「琵琶の音楽史」を専門的に研究することにしました。正直いって最初は、琵琶のレコードを聴いてもあまり感動せず、この退屈な音楽が本当に私の将来を明るくしてくれるのか不安になりました。しかし前田先生という話をしていくうちに、徐々に琵琶研究の魅力がわかってきました。

一九八三年に日本の文部省奨学金を受けて来日。大阪大学美学科で平家琵琶の研究をめざしましたが、実際に琵琶に触れるチャンスがなく、図書館だけの勉強では不満に思っていました。日本に来たからには、ぜひとも琵琶を少し学ぼうと思っていたので、阪大の民族音楽学者の山口修先生に、筑前琵琶の一流奏者、山崎旭萃師匠を紹介してもらいました。七十代の山崎師匠は筑前琵琶の世界一筋に生きてこられた方でした。だからこそ、いろいろな概念にとらわれることなく純粋で、私が伝統音楽を学ぶには非常に好適な方でした。しかし、技術を習得するにはかなりの苦労と努力が必要でした。伝統職人の世界に似たところがあり、見よう見まねで覚えていかなければなりません。そこで私は稽古をテープで録音し、帰宅してから速度を遅くして再生、五線譜にメモディを書き写して再び琵琶の練習をするという、西洋音楽を使った独特の手法を取り入れながら学びました。

私がなぜ実技習得に熱を入れるかというと、一つの音楽を専門的に研究するには、机上の分析だけでは不十分だと考えるからです。音楽学の研究においては、書物を読み理解を深めていくと同時に、その楽器に触れ実践することが真の研究であると思っています。古くからある楽譜を読んで解釈するというのでは、文学と変わりません。音楽はまず音を聴くことから始まるのであって、楽譜のために作られたものではありません。私がめざす音楽のコンセプトは、楽譜からではなく、実演を聴いて説明すること。実をいうとこれはかなり難しい方法です。なぜなら、楽譜なら形として残りますが、実演は後に残らないので、その瞬間に音楽をどう把握し説明するかが困難なのです。

# メディア・コミュニケーション 研究と実践としての講義

中島 純一

(女子大学学芸学部教授)

今日のさまざまなメディアの発達には目を見張るものがあります。より高速なブロードバンドが主流となってきたインターネット、動画配信も可能な第三世代の携帯電話、BSやCSといった衛星波による多チャンネル化の実現といったように、ネットやモバイルメディアなどの新世代のメディアが私たちの周りに出現してきました。これらはテレビを中心とした従来のメディアには見られないデジタル化、双方向といった特性を持ち、私たちの生活―特にそのコミュニケーション行動―に大きな影響を与えています。

私の関心領域は、まさにこのような高度の多メディア化時代におけるコミュニケーションの変容にあります。公私を問わず頻繁に使用されるようになったメールのやり取り、瞬時に時空間を超えるこの新たな伝達方式は、人々のコミュニケーションの意識そのものを変えてきました。従来からのポスト経由の手紙と異なり、ここではよりパーソナルな内容となり、対面の場合以上に親密な会話が行われる場合もあります。また逆にネットと

いうバーチャルな電子社会の中では、匿名あるいはニックネームによるアクセスやメールも可能となりました。暗黙知の欠如したこのような空間では、現実と比べてその心理的距離と社会的距離とがアンバランスなコミュニケーションを発生させる可能性もあります。時空間を超えるこの新たなコミュニケーション方式は、さまざまな利便性、有効性といった光輝く一面を生み出す反面、従来予想することもできなかったような闇の一面も生み出してきました。いわゆるインターネット犯罪と呼ばれるさまざまな違法行為やウイルス感染などの新たな現象の登場です。これらは法学、倫理学、情報学とコミュニケーション研究の境界領域とも言うべき「情報倫理」の研究分野です。必然的に私の関心領域とも重なってきます。これら負の部分も踏まえて総合的な視点から、電子社会に象徴される新たなメディアの拡がりやコミュニケーション変容との相関について研究を続けています。

もう一つの関心領域は、メディアの引

き起こす集合行動の研究です。例えばテレビのCMやドラマなどから引き起こされるさまざまな流行語などの同調化現象、あるいはファッション誌が生み出す新たな流行現象など、メディアと集合行動には密接な関係が見られます。その中でも特に流行とメディアとの相関に関心をもっています。流行と一口に言っても、ファッションから始まって特定の行為、言語、思想に至るまで多岐にわたります。

従来のテレビ主導型のパターンからネット・モバイル時代の今日において、どのような流行現象が発生するのか、またそのメカニズムはいかなるものか等を考察していくつもりです。最終的には主要な関心であるメディアとコミュニケーション変容との相関研究に収斂していくことになりま

す。授業ではメディア・コミュニケーション論という私の専門性を生かした独自の方式を取り入れています。通常の講義を前提としながらも、学生も積極的に参加できるものはないかと長年模索してきました。それは講義がとかく一方通行的で

一元的になりやすいこと、また伝えたい内容がなかなか思うほどに正確に伝わらないといったジレンマがあったからです。「伝える」というコミュニケーションの基本的要素が現実にはさまざまな要因で困難な場合が多いものです。そこで私の担当する講義では二つの独自のシステムを取り入れています。

一つはグループ発表と呼ばれるもので、これは毎回講義テーマの進行にあわせて学生がグループで発表するというものです。受講する学生から見ると、講義内容を同じ学生の立場から見た場合の内容と講義とによって、二重に確認することができます。また発表する学生グループも、どのようにしたら準備してきた内容が聴衆に正確に伝わるかというコミュニケーションの基本を学ぶこともできます。発表方式も全く自由で模造紙から、音楽やビデオを使った方式、寸劇などさまざまなです。毎回どんな予期せぬ発表が飛び出すか楽しみです。二つ目の独自のシステムは、正規試験の中間レポートです。これはただレポート研究をするだけ

ではなく、その表紙をデコレイトすることが課題となります。デコレイトイング・レポートと呼んでいます。学生側から教師に何かを発信するという視点から制作してもらっています。いわばメディアとしてのレポートと捉えています。過去十年以上にわたって実施していますが、毎回実に面白い奇想天外なレポート表紙が出現します。例えば金属や板を使つての彫刻、布地や編み物の表紙、学生自身の写真でできた表紙、音の出る表紙など実にさまざまです。この課題の狙いは、学生を単に試験成績という一元的な角度から評価するのではなく、さまざまな角度からその才能を引き出そうとすることにあります。教育(education)という言葉の語源と言われるラテン語のeducareには「引き出す」という意味があるとのこと。今日のコミュニケーションの特徴でもある双方向的流れのように、教育の場においても常に学生と教師との双方向的コミュニケーションが実現できるようめざしていきたいと考えています。

# 「国語表現」の 授業実践

鴻池 雅子

(高等学校国語科教諭)



二年選択科目「国語表現」は「現代にある多様な言語活動のうち、従来の国語教育では重視されてこなかった分野における言葉の分析・批評・研究を通じて、現代と現代の言語行為に対する総合的理解を深める（※）」ことをねらいとする週二時間の講座である。

この講座を担当して五年、諸先輩方の実践に学びながら、自分なりの試行錯誤を繰り返してきた。これは、昨年度「国語表現」三学期の実践報告である。

「今学期はみんなに自分自身について表現してもらいます」。学期の授業冒頭でそう言うと、生徒たちは一様に驚いた顔をすする。彼らは一学期に「広告文案（同志社高校広告制作）」で言葉を意識することを、「記号論」では言葉と文化の関係を学んだ。二学期には「笑いの分析」で言葉の働きを、「シナリオ」では日常の生活を切り取って表現することに取り組んだ。いずれのテーマにおいても、彼らの言葉の分析と言語感覚の鋭さにはしばしば感嘆させられた。しかし、何かが足りなかった。それは「心をこめて言葉を紡ぐ」ということだった。言葉とその背景に対する理解と考察を深めてきた彼らに私が最後に求めたものは、自分が獲得した言葉で自身を語るといふものであった。

授業は、「分析編」「実践編」に分け、前半の「分析編」では徹底的に作家たちの文章・文体・言葉の選び方を分析し、その上で、「感覚」「情景」「人間」を題材にそれぞれ四百字の創作をした。分析を繰り返し、書くことを繰り返し、受講生仲間の作品を読んで相互批評を繰り返しているうちに、彼らの言葉の中に魂が入ってくる。

「生プルーンというものを初めて食べた。私が今まで食べたどの果物よりも圧倒的な甘さだった。酸味もあつたが甘さに掻き消された。筋っぽくて水気の少ない果肉もそれを増長させた。食べ過ぎると胸の悪くなる予感を含んだ味。アンズ形の種に近づくとその甘さが退き、少し酸味が増す。そして果肉が粘っこくなる。この胸に溜まる味が私はクセになってしまった。

また食べたくてこの前スーパーでパック詰めで買ったが、全然甘くなかった。私の中であの味がより大きくなってしまった。」

（感覚を書く―生プルーンの味覚描写より）

「五畳分程の病室がやけに広く感じられた。白いベッドの上にはぼつんと横

いる。

「#書くこと#」って、私にとつて何なのか…って最近よく思います。とくに最終課題から。書くことで嘘になる気がしたり、それが不安を癒すためのものでしかないのかと、そういう行為自体嫌悪したり、どこまで書けば終わるのかと不安になったり。でも、書く機会が与えられて良かった。今だって、これを書くことが出来てよかった。思いも、目に映る景色も、実感も、全て忘れたくない。携えていたい。」

「自分を#見て# #書く#のはとても難しい。でも、ただなんとなく生きていくより、自分を見つめることで、自分を語れるといいなと思う。いつか、自分の言葉で、人に語れる時が来るといいです。」（授業の感想より）

三年生になり、解散した受講生たちは胸の内を読まれてしまった私と会うと、心なしか恥ずかしそうにしている。

※同志社高等学校「二年選択登録の手引き」より

たわっている父。「来たか。」力なく微笑む父の、その口元には白髪交じりのヒゲがのびている―

父は料理をするのが好きだった。キャベツを炒めただけだったけれど。

私に文句をつけるのが好きだった。「アケタラシメル」結局自分だつてできていなかったけれど。

自分の昔話をするのが好きだった。母しか聞いていなかったのに。

古臭いと言われても、自分の考えは曲げない人。何度もケンカしたけれど、父は絶対に謝らなかつたな―

真つ白な空間、沈黙の空気、父と二人きり。父はただ「元氣か？」を繰り返すばかりだった。私は息が詰まりそうになって、うなづくことしかできなかった。言葉に出せば、父が今まで築いてきた強さを壊してしまう気がした。

（人間を書く―父の人物描写より）

ここからいよいよ「自分を表現すること」とりかかる。「実践編」はプレインストロミングから始まった。「自分」に関連して思いつく百個以上の言葉を挙げさせるのである。この作業は自分という人間の意外な側面を浮き彫りにする。ここで出てきた言葉の海から題材を探

し、主題を決定し、思考メモ（主題に至るまでの流れを矢印で結んでいく）を作成する。書き出しを考え、各人がそれぞれに八百字の作品を書き上げた。自分という人間の心の奥底を掘り下げる一連のこの作業の過程では、見ているこちらが苦しくなるような、そんな場面も少なからずあった。そんなに苦しいなら、まだしばらく蓋をしてもいいよ、思わずそう言ってしまうくなるほど、つらい胸の内を明らかにした生徒も多かった。こうして、受講生百二十三人の作品が出来上がった。

生徒が最後に書いた作品は、ここで紹介することは出来ない。家族、友人、恋愛、クラブ活動、肉親の死。それぞれの生徒が今、自分の心を最も占有しているものを、苦しみながら心の中から取り出して言葉にした。書くたびに明らかになっていく自分の心に涙する生徒も少なくなかった。それだけに、そこに誕生した作品はただ一人読むことを許された私の胸の一つ一つ強く響いた。他人を動かす言葉を、と訴え続けてきた一年間だったが、誰よりも私自身が彼らの言葉に大きく突き動かされた。誰かのためでなく、自分のために書かれたこれらの作品群を私は自分の財産にしていきたいと思つて

# 新領域・コミュニケーション教育

## —Communication & Media Class—

西田 喜久夫

(国際中学校・高等学校国語科教諭  
/2001年度 Communication&Media 担当)



本校のコミュニケーションセンターができて、今年で五年目を迎える。コミュニケーションセンター(以下CC)とは、従来の図書館とも、視聴覚教室とも、コンピュータ教室とも一線を画した、全く新しいコンセプトの施設である。今そのことについて詳しく触れるだけの誌面がないので割愛するが、このセンターを使つてどのようなことができるのか、またどのようなことをしてほしいかを一年間かけて学んでいこうという授業が、高校一年生の必修科目、「Communication & Media」(以下C&M)である。

具体的にはC&Mの授業では、次のようなステップを踏みながら、授業を展開している。

- ◆ 段階Ⅰ 情報の収集
- ◆ 段階Ⅱ 情報の分析
- ◆ 段階Ⅲ 情報の加工
- ◆ 段階Ⅳ 情報の発信

この段階は、通常我々がリサーチをする段階と同じである。つまり、この授業の第一の目標は、リサーチのための基礎的な方法を学ぶことにある。

その目的達成のために、まず一学期は実際にいろいろな情報ソースにあたって、各ソースの特長を身につけ、コンピュータの基本的操作を学び、ビデオカメ



C&M パンフレット作成グループのプレゼンテーション

重要なメディアであり情報ソースであると考えている点である。

二期は、この一学期の基礎知識をもとに、実際にグループでテーマを決めてリサーチを行う。二〇〇一年度は、「商品開発プロジェクト」と題し、現在世の中になくて、あったら便利な商品を提案するプロジェクトを行った。

その過程では、各グループで自分たちの開発したいジャンルの現在の市場の動向を調査すると共に、アンケートを実施して意見を求め、その中から時代の指向を見つけたすというプロセスを要求した。生徒たちは、専門店に足を運び店員から直接情報を得、パンフレットを持ち帰り、自分たちの開発の足がかりとしていた。

さて、三学期はその開発したものを実際に商品化できたという前提で、「ビジネス・プレゼンテーション」「パンフレット作成」「テレビ・コマーシャル制作」「ラジオ・コマーシャル制作」「ポスター作成」のいずれかをするように課題を出した。つまり、これは自分たちの考えを形にして発表することであり、情報の発信に相当する。

各グループで、さまざまな工夫を凝らした作品を作りだした。パンフレットでは、実際のパンフレットには何が書かれ

ているのかを検証しながらの作業になった。

テレビ・コマーシャルを制作したあるグループは、カメラのフレーム外から商品が飛び込んでくるという場面の撮影をし、映像が持つ「嘘」を学ぶ、メディア・リテラシーのような学習をした。

ラジオ・コマーシャルでは、どうすれば形のない商品を伝えられるかに悪戦苦闘し、ビジネス・プレゼンテーションを行ったグループは、説得力を高めるために、プレゼンテーションソフトを利用したり、統計を示したり、口調を研究したりと自分たちなりに工夫を試みた。

どの作品も、それなりに努力の跡が見られるが、ここで重要なのは最終的なできあがったものだけではないことは明らかである。むしろ、その過程において、どれだけ情報をうまく扱えたか、自分が発信するために、どれだけのことを学習したかにある。また、各学期末に行う自己評価によって、自分の不足する部分とどれだけの確に把握できたかにある。

そして何よりも、この学習活動を通して、どれほどコミュニケーションを意識したかということが、最も重要なポイントである。それは、情報とのコミュニケーションであり、空間とのコミュニケーションであり、またその空間を共有する

ラ等の機材の操作を覚えることに当てられる。また、情報を収集する上で、著作権への意識を喚起する。それには、「メディアグラフィック・カード」と呼ぶ、本校の作成したカードが利用される。これに、情報ソースについての記録を残していくことを義務づけている。

情報ソースについて特徴的なこととしては、ドキュメントや視聴覚資料、インターネット上の情報、オンラインデータベースだけでなく、「人」や「体験」もラ等の機材の操作を覚えることに当てられる。また、情報を収集する上で、著作権への意識を喚起する。それには、「メディアグラフィック・カード」と呼ぶ、本校の作成したカードが利用される。これに、情報ソースについての記録を残していくことを義務づけている。

人とのコミュニケーションである。この授業が、「Media」ではなく、「Communication & Media」であるのは、まさしくそこに理由がある。

情報は一方的なものではない。発信する人がいても受け取り手がいなければ、取った情報も自分が止めてしまえば、死んでしまう。情報量だけがインターネットの普及と共に爆発的に増加したが、その中にある有益な情報を識別するためにも、コミュニケーション能力は欠かせないものでないものであろう。この授業では、そのような生徒たちの能力を高めることをめざし、その経験を他の授業で生かしてくれらることを期待してやまない。

昨年は、中学・高校のカリキュラム変化に伴って日本のさまざまな地域から、CCとC&Mの見学に引きも切らず来校された。C&Mを情報教育の一つのモデルとして見に来られていたのであるが、単に情報機器を扱うだけではなく、コミュニケーションというものが授業のポイントであったことをぜひ記憶しておいていただければと、いつも申しあげてきた。まずは、「人」であること、それは最も重要なことであり、教育の出発点であると確信している。

knshida@imnl.doshisha.ac.jp